

一 遺跡の位置と環境

カミノハナ古墳群（天草郡松島町大字合津字上6276及び6278番地所在）は天草諸島の一つ永浦島の東端にあって、8基の小円墳よりなる。この島の付近は屈曲の多い海岸線をもつ大小の島々が、狭い海峡を介しながら互いに入り組んでいて、さほど高くない丘陵は、緩やかに傾斜しながらもその端部に至ってはかなりの落差をもって海中に没している。このため島々には平野は極く稀で、丘陵間の極めて狭い広がりの中にかつての水田や畑の痕跡が認められるにすぎない。このあたりの島々の植生はほぼ単純で、ナラ・マツ・クスなどが二次林を形成し、その間を縫うようにしてツツジ・シダ類が繁茂している。海岸は一般に遠浅でスズキ・タイ・ボラなどの格好の漁場となっていて、またカキ・ハマグリ・アサリなどの貝類も豊富で、恵まれた自然環境の中にある。

三角町から松島町にかけての一带では、先土器時代の遺跡・遺物は未だ報告されていない。縄文時代の遺跡や遺物散布地は30ヶ所ほど知られている。うち際崎遺跡や前島遺跡のように丘陵上か丘陵の裾もしくは突端にある遺跡では、小規模ながら貝塚を伴うのに対し、その他の大部分の縄文時代遺物採集地は、今日の汀線近くか海面下に位置する。貝塚を伴う遺跡の多くは小規模で、出土品も土器の他、石鏃や石斧が極めて少量しかない貧弱なものであるのに対し、海岸の汀線近くで発見される遺跡での出土遺物の量は多く、弥生時代後期の土器や土師器・須恵器なども出土することから、本来的には海岸平野に立地していた遺跡が、天平16年の災害記事から推測される大地震によって、海面下に没した可能性を説く人も^{註1}いる。

天草諸島には今日、190余基の古墳が現存している。しかし、耕作などにより旧状を留めているものは少く、また既に多くの古墳が破壊を蒙っていることが推測される。現存する古墳をみてゆくと、多くは海岸線に沿った台地上とか、海側に突き出た岬の尾根上に立地する。第1図に示すように、維和島や永浦島をはさんで大矢野島と上島の沿岸部には、古墳が集中して分布し、立地上から海上交通路との密接な関係を窺いうる。これら古墳はそのあり方からいくつかの類型にまとめることができる。1つは平松古墳群や千崎古墳群のように、明確な墳丘をもたず、箱式石棺を内部主体とする



第1図 周辺遺跡位置図

1. 平松古墳群 2. オサキ古墳群 3. 重盛山古墳群 4. 島崎古墳群 5. 際崎古墳群
6. 磯山古墳群 7. 田井の浦古墳 8. 辺田古墳群 9. 大崎古墳群 10. 丸子島古墳 11. 寺島古墳群 12. 成合津古墳 13. 女鹿申古墳 14. 諏訪原横穴 15. 田端横穴群 16. 上田端横穴 17. 犬飼横穴群 18. 千崎古墳群 19. 千崎住吉祠古墳 20. 桐ノ木墓地古墳 21. 桐ノ木尾羽根古墳 22. 浮無田北古墳 23. 浮無田南古墳 24. 弓田古墳 25. 仙の十長瀬古墳 26. 北が島古墳 27. 越地北古墳 28. 越地南古墳 29. 大鷲浦古墳 30. 白須古墳 31. 上大戸古墳 32. 広浦古墳 33. 長砂連古墳 34. 柳の石棺 35. 西小柳古墳 36. 鯉が浦古墳群 37. 船人島石棺 38. **カミノハナ古墳群** 39. モへ山古墳群 40. 永浦古墳 41. 瀬崎古墳 42. 塚大明神古墳 43. 梅ノ木古墳 44. 保が島古墳 45. 山見古墳 46. 大戸鼻古墳群 47. 阿村鬼塚古墳群 48. 前島貝塚 49. 梅殿塚古墳 50. 竹の島古墳群 51. 龍崎古墳 52. 楠甫鬼塚古墳 53. 水車古墳 54. 前島古墳 55. 台田古墳 56. 荒潮古墳 57. 新地古墳 58. 白当古墳 59. 大浦古墳群

もので、多くは数十基のまとまりをもって一群を形成する。大型の横穴式石室をもち、その内部に装飾文を施す大戸鼻古墳、長砂連古墳などは、一基もしくは数基で、他の古墳群とは切り離された場所に存在し、小型の横穴式石室をもつグループは数基もしくは十基前後のまとまりをもって分布する。カミノハナ古墳群はこの最後のグループに属する。天草諸島に於ける竪穴式石室を内部主体とする古墳の調査例は極めて稀らしいが、成合津古墳や桐ノ木尾羽根古墳の知見からすれば、箱式石棺群の中に客体的なあり方で存在することが認められる。

カミノハナ古墳群は永浦島の東端、海拔約30mの丘陵頂部に1基円墳があり、そこから南に緩やかに傾斜する丘陵の尾根に沿って3基、この中途から西に延びる尾根上に3基と1基存在する（第14図参照）。われわれの調査では、丘陵頂部の円墳を1号とし、南の尾根に続く古墳を2～4号、3号から西に展開する尾根に沿って5～7号、4号から西に下った場所にある古墳を8号とした。昭和31年に坂本経堯氏が調査された時には9基とされている。^{註2}熊本県文化課の埋蔵文化財包蔵地調査カードを参照してみると、5号墳と6号墳の間のやや北側に寄った所に別の1基が存在するように示してある。実際径2mの範囲に石材の残片が「墳丘」状にまとまっているのがみうけられる。カミノハナ古墳群はすべて盗掘を受けて破壊されているが、いずれも古墳の基底部は残されている。ところが、この「墳丘」状のまとまりにはその基底部がなく、また基底部が仮にあったとしても、5号、6号と近接しすぎるために、墳丘が重なりあう不都合が生じる。また石材の散らばり方は無秩序で、石室が破壊されたとは認めがたい。これらの点からして、この一見「墳丘」状に見えるまとまりは、5号ないし6号の盗掘の石材をまとめて捨てた跡とみなされる。結局カミノハナ古墳群は8基の小円墳で構成される古墳群であると認められるのである。（坂田）

註1 山崎純男「天草地方の始原文化の一側面」『熊本史学』40, 1972

註2 坂本経堯・経昌「天草の古代」1971, 坂本経堯「天草の古代—松島地区調査概報—」『熊本史学』10, 1956。

二 調査の目的と経過

天草諸島の古墳は、既に破壊されたものを含めて200基以上に及ぶ。その大半は調査がなされておらず、その占地・自然環境・生産基盤等々の要因によって、海洋性の強い文化の所産であることが論じられているにすぎない。近年横穴式石室墳の成立とその系譜に関する問題点が様々に論じられているが、その問題解決のための資料はわずかしかなく、この天草諸島に於ても論拠とすべき資料は一握りにすぎない。この地域では弥生時代の伝統を引く箱式石棺墓を内部主体とする小墳丘の円墳が顕著な展開をみせているが、それらに混在してやや大型の墳丘をもつ石障系古墳や肥後型石室を有する古墳もみられ、また小型の墳丘をもつ横穴式石室墓を主体とした群集墳も認められている。この様に複雑な天草における横穴式石室展開過程の一端を把握するために、松島町史編纂事業に併行して、カミノハナ古墳群の調査を企画したが、現存する8基のカミノハナ古墳群は、いずれも盗掘破壊されているため、古墳の配置図と石室の構造を把握することを第一の目的にした。

カミノハナ古墳群は、既に大正年間柴田常恵が踏査し、その後昭和31年、坂本経堯氏を中心として調査が行われた。それによると、丘陵頂部にある1号墳では、天草では稀らしい円筒埴輪、人物埴輪が出土し、周濠の存在が指摘されている。この調査によりカミノハナ古墳は終末期の群集した小型横穴式石室として推測されてきた。

発掘調査は1981年と82年の2回に分けて行った。第1次調査は3月27日～4月23日までであった。まず調査の障害となる最小限度の樹木を伐採した後、2～5号墳の石室内清掃、実測を行い、併行して墳丘測量、地形測量を実施した。調査は当初10日間の予定であったが、春雨にたたられ、また3号墳からは予想外の遺物が出土したため、4月4日日本隊が撤収した後、4月23日まで断続的に調査を続行した。

第2次調査は82年3月11日～21日及び4月9、10日の13日間行った。1号、6号墳の石室内清掃と実測を実施し、地形測量の補足をした。1号墳では併せて周濠の有無を確認するために、墳丘の北側から西側にかけて、A・B2本のトレンチを設定し、3号墳では墳丘構築技法の追求のため、幅60cmのトレンチを墳丘の東と北に設けた。

両次の調査期間中、古墳群の調査に併せて周辺地区の踏査を行い、古墳群西下の海

浜で、弥生時代後期から古墳時代後期に至る土器片を採集した。さらに前島では5号橋に隣接する海岸で、縄文時代早期・前期を主とする土器片と石器を多数蒐集した。

(松尾)

三 調査の概要

1号墳(第15図; 図版2上及び6~8)

1号墳は永浦の東端近く、南に延びる尾根の頂部、海拔約30mにあって、あたり三方の瀬戸を一望できる格好の場所に占地する。墳丘は盗掘その他による破壊で不整形をなし、墳頂部は削平を受けているが、現存する長径は13.2m、比高1.57mを測り、当古墳群中最大規模を有する。墳丘の西北側は丘陵の一部をカットして構築され、丘陵が下降する東や南側とは比高差が大きい。調査前には墳丘の各所に石材が散在し、石室の上半部は破壊を受けて露出していた。また石室の内部には天井石の一部や側壁に使用されていた石材、それに多量の埴輪片が落込んでいた。

1号墳の内部主体は西南方向に開口する両袖型の横穴式石室で、玄室の奥壁が墳丘のほぼ中央に位置する。玄室は長さ1.8m、幅1.4mの長方形で、玄門の内側には、幅7cmの闕石を高さ15~25cmに配して区切りとなしている。石室の奥及び左右壁には、床面よりの高さ30~60cmの腰石を据え、その腰石の背後から、ブロック状の石材を平積みにして石室を構築している。側壁左右の腰石は、直立するものの、奥壁は内傾しており、本来の姿か否か不明である。奥壁を構築する腰石上部の平積みは、内傾しながらも元の形状に近い状態であったが、左右壁のそれはほぼ全壊に近い。奥壁の両隅の石材は、腰石の高さより上部で抹角状に石材を渡しているのが観察された。床面は赤褐色を呈し粘性の強い粘土の上位に、2~3cmほどの厚さに玉砂利が敷かれていたが、玄室両袖の部分と左奥壁より $\frac{1}{4}$ ほどは、盗掘による攪乱を受けて、床面は破壊されていた。床面では何らの排水施設も確認できなかった。

羨道は閉塞石からの長さ1.2m、幅0.9mで、羨道の床は玄室に向かって下降し、闕石の上面へと連っている。羨道の側壁は、右側壁の玄門寄りの部分に板石を1枚立てかけた以外は、砂岩の角礫を不規則に並べて構成され、内部には、大つぶの礫と粘土が詰っていた。

玄門は両袖石と3枚の板状閉塞石で構成されている。袖石は右側が高さ1mで、左側はそれより約30cm低い。左袖石の上には、墳丘よりのびる板石が覆さって、その差を補っている。

周濠確認のため、墳丘の北と西の丘陵端部と墳丘の間のやや窪んだ場所にA・B両トレンチを入れた。この結果表土下は、すぐ地山の赤褐色土が緩やかなカーブを描いて墳丘と連り、周濠に類する人為的な溝の痕跡は何も認められなかった。丘尾切断の結果が周濠とみまちがわれたものであろう(図版8下)。

1号墳から出土した遺物は、埴輪片178片をはじめ須恵器の甕、大甕、器台各1点、鉄鏃45～50本、鉄剣1点、刀子1点、鉄斧1点、横刃板鉄留短甲残欠数片、小玉151点が出土している。埴輪及び須恵器が、石室内に落ち込んだ土砂、石材と混在して採集された以外は、玄室の床面からまとまった状態で出土した。右奥壁から右側壁にかけての場所で鏃・剣・斧がみられ、中でも鏃は40～50本が鋒を奥壁に向けて束ねた状態で検出された。玉は奥壁の中央部近く25×15cmの楕円内に151点集中して出土した。羨道部では土砂や石材に混じって、須恵器片、短甲片、鉄片が採集された。

(西谷・吉武)

2号墳(第16図; 図版2下及び9)

2号墳は、1号墳から南にのびる尾根上の約47cm下方に位置する。径約10mと推定される円墳で、比高は現存約1.1mである。西に開口する横穴式石室を内部主体とし、石室の中心は、墳丘のほぼ中心にあたる。当古墳は、昭和31年の坂本経堯氏らの調査の際、2号墳と呼ばれたものであると思われ、石室上部はすでに露出し、石室内には調査後のものであろう礫混じりの土が堆積していた。また、天井石らしき石材は周辺にも残っていなかった。石材のほとんどは砂岩であり、特別な加工を施された様子はない。

羨道は閉塞石からの長さ約0.9mで、床は玄室に向かって下降している。入口付近にはやや大きめの石が横に仕切るように並んでおり、羨道内には径20cm前後の砂岩礫と土がつまっていた。左壁はほとんどが破壊されていたが、右壁は厚い板状の石が立てられており、玄門近くでは、この上に羨道上部をおおうような形でブロック状の石材が持ち送り状に数段に積まれていた。これらの石は、玄室の周囲にめぐらされてい

る控え積みに連なるものであると思われる。

玄門部は、左右の袖石と薄い板状の閉塞石によって構成されており、閉塞石上端部は欠失していた。玄室プランは長さ約1.9m、幅約1.3mの長方形を呈し、主軸が羨道に対して奥壁側がやや北寄りにずれている。玄門から約10cm奥壁寄りの所に、長さ約60cm、高さ約7cmに闕石が配されている。左・右と奥の三壁には、それぞれ一枚の巨石が腰石状に配されている。左・右両壁の腰石は上端の厚さ10cm内外であり、左壁の玄門寄りの所で観察したところでは、腰石の背後には腰石の高さまでブロック状の石が積まれ、さらに腰石上部に石材を一段渡しかけ、その上からはやや持ち送り気味に石材が平積みされている。また、左壁玄門側の半部では、腰石の長さが明らかに壁より短く、積み石もかかっておらず、腰石としての機能を果たしていない。奥壁の腰石は両側壁より厚いようで、腰石上部にやや持ち送り気味に石材が平積みされている。奥壁の両隅では腰石より上は、石材が抹角状に配されているのが観察される。床面は黄褐色の粘質土で、玉砂利が敷かれていた。排水溝は検出されなかった。

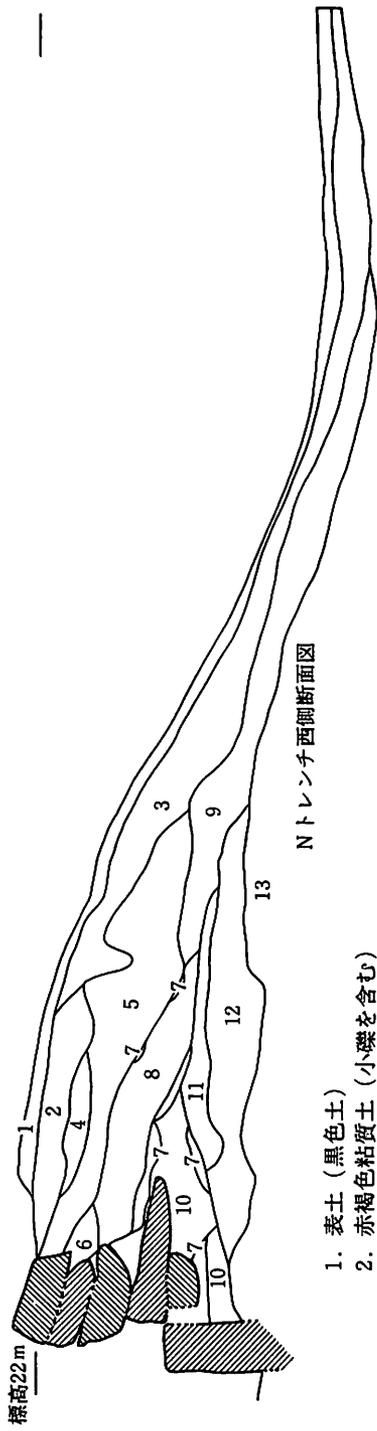
玄室左壁の床面より高さ約48cmの積み石の間より鉄製刀子が一本、また同じく玄室左壁近くの床面より、鉄製刀子が鉄剣上に重なる状態で各1本ずつ出土した。また、羨道内の埋土からは土師器・須恵器の小片が数点出土した。 (宮本)

3号墳 (第17図; 図版3上及び10~13)

1号墳から4号墳に続く尾根と5号墳から7号墳までがある尾根の分岐点に位置する、径12m、比高1.6mの円墳である。

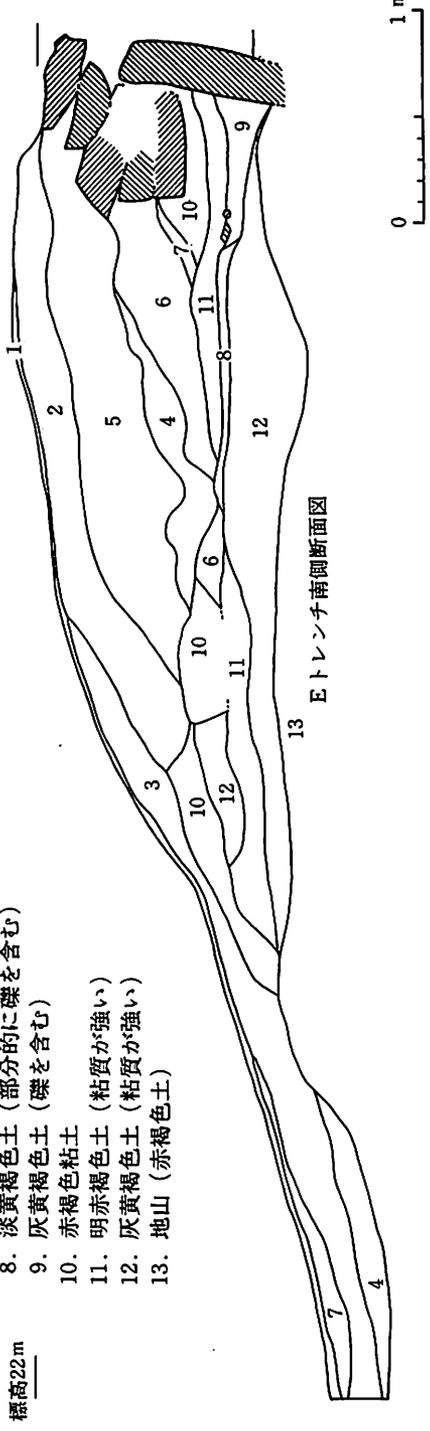
調査前には羨道部の玄門付近と、玄室の羨道寄りの2ヶ所に盗掘孔があり、墳丘の各所には壁体に使用されていたとみられる石材が散在していた。天井石は石室から離れた墳丘の裾に1点見られた。東側の墳丘は旧状に近い状態であったが、西側では削られて低平気味になっている。

石室の北側と東側に幅60cmのトレンチを設定して、墳丘及び石室の構築法を調査した所見によると、まず赤褐色の地山を削平した後に、多量の小礫を混ぜた黄褐色粘質土を東側4m、北側2.5mの範囲に積んで古墳の基盤を形成し、腰石を据えている。この後腰石の背後に粘質土を3~4層積みあげ、その点から壁体となるブロック状の石材を持ち送り状に構築している。このため、壁体及び天井石の重量は直接には腰石



Nトレンチ西側断面図

- 1. 表土 (黒色土)
- 2. 赤褐色粘質土 (小礫を含む)
- 3. 黄褐色土 (赤味を帯びる)
- 4. 黄褐色土
- 5. 暗い赤褐色土 (部分的に礫を含む)
- 6. 赤褐色粘質土
- 7. 灰褐色粘土
- 8. 淡黄褐色土 (部分的に礫を含む)
- 9. 灰黄褐色土 (礫を含む)
- 10. 赤褐色粘土
- 11. 明赤褐色土 (粘質が強い)
- 12. 灰黄褐色土 (粘質が強い)
- 13. 地山 (赤褐色土)



Eトレンチ南側断面図

第2図 3号墳N・Eトレンチ土層断面図

にかからず、腰石はいわゆる「石障」状になっている。この後は器壁を積みあげながら、その端部を粘土と石で控え積みしているが、その範囲は狭く、石棺系石室の構築法と極めて類似する（第2図）。

内部主体は西に開口する両袖型横穴式石室で、玄室の奥壁が墳丘のほぼ中心にある。羨道は確認できる範囲では閉塞石より長さ約1m、幅約90cmで、玄門に向って下降している。羨道の両側は、板石を立てて壁体となし、その内部は塊石と粘土で固められていた。左玄門部では玄門と羨道の側石に狭まれて、墳丘に埋め込まれた塊石が羨道部にのび、その左端近くから板石の閉塞石が据えられている（図版11上）。このことは羨道が低いこととあわせて天井石が積まれる以前に羨道部は閉塞されたことを推測させる。玄室は長さ約1.9m、幅約1.4mの長方形を呈す。玄門の内側には幅15cmの闕石を高さ5cmに配す。床面は黄褐色粘土の上に5cmの厚さに玉砂利が敷かれており、左壁・奥壁の方に僅かに傾斜していた。排水溝は検出されなかった。左右壁・奥壁は床面より高さ35～60cm、厚さ3～25cmの「石障」状の巨石が上方に向かうに従いやや内傾して据えられている。その背部からはブロック状の石材を平積み持ち送りに構築しており、奥壁の両隅は抹角状に石を積んでいる。石材の多くは砂岩である。

遺物は墳頂部で鉄刀片が1片出土した他、すべて玄室床面に敷かれていた玉砂利の上、あるいは玉砂利に挟り込むような状態で出土した。検出場所は4ヶ所に大別できる。まず奥壁中央付近一帯から、丸玉・小玉・勾玉・耳環等が部分的に列をなすように検出された。次に左側壁では、中央付近から須恵器片・鉄鏃片が出土した。右側壁では、中央付近から奥壁にかけて一振と思われる鉄刀片・鉄片等が確認された。また右袖石寄りの一帯では、闕石直前に横矧板鋌留短甲の残欠が径25～30cmほどの半円状に折れ重なり、上へ向かってすぼまる状態で検出され、これに連なるようにさらに右壁へかけて、鋌を有する鉄板片・鉄鏃片・刀子片等が散乱していた。その他右袖石隅から若干の須恵器片が出土した。玄門部近くはやや荒らされた形跡もみられるが、奥壁近くは埋葬時のままとと思われる。また須恵器の形式により追葬のあったことも考えられるが、層位的には把握されなかった。出土遺物は下記の通りである。

鉄製品；横矧板鋌留短甲片140片以上、鉄鏃5本以上、鉄刀2振以上、刀子2本以上。 装身具；勾玉3個、丸玉48個、小玉232個、耳環4片。 土器；須恵器片56片

(大甕4、坏蓋13、坏身3)。

(古城)

4号墳(第18図; 図版3下及び14)

1号墳より南へ伸びる尾根上にあり、3号墳の南約5mのところの位置する円墳である。墳丘は現存径約11m、比高約1mを測り、頂部はすでに削平されている。調査前は石室の上半部が破壊され、天井石とともに多くの礫・土が石室内に落ち込んでいた。

主体部は西に開口する両袖型横穴式石室で、全長約3m、石室の中心が墳丘のほぼ中央に位置する。石材はすべて砂岩である。羨道部は幅90cm、閉塞石からの長さ85cmで、玄門近くの両側壁は一枚の板石を立て上部にブロック状の石を不規則に積む。そこから入口付近まではブロック状の塊石を長く据え、その上部は2～3段に塊石を積みあげている。床面は玄室に向かって閩石上部の高さまで下降し、そのレベル差は約40cmを測る。羨道内部は小児頭大の砂岩礫を下から順に積み、粘質の土とで充填されていた。羨道の仕切りを示すと思われる石列は、墳丘をめぐる裾石の一部を成している。この裾石は、石室を囲む半径約2mほどの円状に配されるらしいことをスティック・ポーリングにより確認した。玄門は左右の袖石と板状の閉塞石2枚より成っている。玄室は長さ約1.7m、幅約1.3mの長方形を呈する。玄門の内側には長さ約1.2m、幅約15cmの閩石を床面より約20cmの高さに配している。奥壁・側壁とも大きな腰石を据え、その上端からブロック状の石を平積みで持ち送っている。腰石は奥壁で高さ約70cm、右壁が高さ約80cmで、左壁は二石を用い奥壁側より各々、高さ58cm、長さ135cm、高さ55cm、長さ60cmである。左壁では奥壁側の腰石の末端部で積み石が腰石にかかっていないのが認められる。奥壁両隅は抹角状に構築されている。床面は黄褐色粘土の上に玉砂利を敷きつめ、僅かに左壁・奥壁の方に傾斜している。排水溝は検出されなかった。

遺物は、玄室の奥壁より約95cmの左側壁沿い床面上で、長さ約19cmの鉄刀一振が、切先を玄門部に向けた状態で出土した。また、羨道部の詰土より須恵器甕片と土師器片が、玄室内覆土より須恵器提瓶片が出土している。

(古荘)

5号墳(第19図; 図版4上及び15、16)

3号墳より西へ約7m下方に位置する円墳である。墳丘は現状で径約9.5m、比高

約1.5 m。調査前は玄室上部が露出し、羨道部はほとんど破壊され、天井石が落ち込んでいた。

内部主体は西に開口する両袖型横穴式石室で、石室の中心が墳丘のほぼ中央に位置する。羨道部は幅約70cmで、右壁では玄門付近に3、4個の石材が残存するのみであるが、左壁は厚さ10～15cmの石を平積みし、長さ約1.5 mである。床面は玄室に向かって下降し、左側袖石の頂部に控え積みの石がかかっていた。両袖石の内側に幅約10 cm、長さ約45cmの闕石を玄室床面より約10cmの高さに配している。玄室は長さ約1.7 m、幅約1.1 mの長方形プランで、奥壁・右壁に高さ約70cm、幅約12cm、左壁に高さ約40cm、幅約10cmの巨石を「石障」状に配する。左壁玄門付近の状態から推察すると、巨石の背後からブロック状の石が平積みされており、巨石の上部からは持ち送り式に積まれている。奥壁両隅は「石障」状の石より上に抹角状に3個ずつ石を配している。石材の多くは砂岩である。床面は玉砂利を含む黄褐色粘土層が攪乱されており、その下には明褐色の脆い小石を含む明黄褐色の粘土層が観察された。また奥壁付近では径5～8 cmの扁平な石を数個並べ敷く状態が見られた。排水溝は発見されなかった。遺物も検出されなかった。(永目)

6号墳(第20図; 図版4下及び17～19)

5号墳の墳丘裾より約5 m西側に下った所にある、径8.9 m、比高約1.5の円墳である。すでに盗掘のためかなりの攪乱を受け、天井部と壁体の大部分を失っており、調査開始時には、それらの石材が石室内外に散在していた。石材の多くは砂岩である。

主体部は西に開口する両袖型横穴式石室で、石室の長さ約1.6 m、幅約1 mの長方形を呈する。右側袖石は途中で折れ、左側は抜きとられて、閉塞石もすでに失われていた。玄門の内側には幅10cmほどの2個の闕石が羨道部に向かって開くように配されている。奥壁と左右両壁には床面より高さ約40～45cmに腰石を据え、その背後よりブロック状の石材を積み上げているが、腰石上部の左右壁の大部分はすでに破壊しており、左右奥壁近くの部分で、2枚の腰石をまたぐように、割石を抹角状に積み上げているのがわずかに認められた。床面は黄褐色で粘質の深い土をベースとし、小指大の礫を敷いていた。排水溝は検出されなかった。羨道部は長さ約1.2 m、左側は破壊が激しくまた羨道中央部に大きな盗掘痕があって、委細は不明である。わずかに残さ

れた右側壁の下位では、玄門に接して一枚の長方形板石を縦に据え、入口近くはブロック状の塊石を平積みしている。

遺物は大部分が床面上で出土した。検出場所は3ヶ所に大別できる。まず奥壁から20cm、右壁から20cm付近に、碧玉製勾玉1点、水晶製切子玉4点、軟玉製丸玉1点、ガラス製小玉1点、鉄製耳環1点が集中して検出された。配列の秩序はみられなかった。その周囲15～40cmの範囲に丸玉2点が出土した。次に右壁沿に奥壁より50cm付近から玄門にかけて、幅約20cmの範囲に鉄片が集中して出土した。鉄鏃片・鉄刀片・刀子片が重なった状態で検出され、鉄刀は1振以上確認できた。これに連なるように奥壁から30cmの箇所に鍔金具が出土し、玄室の左側壁にも若干の鉄片が出土した。また玄門から40cm、左壁から40cm付近に、金環2点・鉄製耳環1点が出土した。その他に玄室覆土より須恵片1点、羨道詰土より土師器1点、須恵器1点が出土した。玄室・羨道ともに荒らされていると思われるが、玄室内、右壁沿の鉄片が集中している箇所は埋葬時のままとと思われる。出土遺物は下記の通りである。

鉄製品；鉄鏃4本以上、鉄刀1本以上、刀子1本以上。 装身具；勾玉1個、切子玉4個、丸玉3個、小玉3個、耳環4片。 土器；土師器片1点、須恵器片2点。

(入江・松田)

7号墳 (図版5上)

6号墳の西約8mの崖の端近くに位置する。石の散乱がなければ墳丘と見わけられないほど低平に削り取られ、墳丘の境もはっきりしない。現状は径約6m、比高は50cmにも満たない。石室下部の残存状態を見ると、西に開口する横穴式石室で、玄室プランは長方形を呈している。

8号墳 (図版5下)

4号墳より西南約7m、海を臨む尾根上にある円墳で、墳丘上に小児頭大の石塊が無秩序に散乱し、アラカシの木が繁っている。そのため、墳丘の西側の境は不明確で、主体部の推察も困難である。現状は径約8m、比高約2mである。 (古城)

四 出 土 遺 物

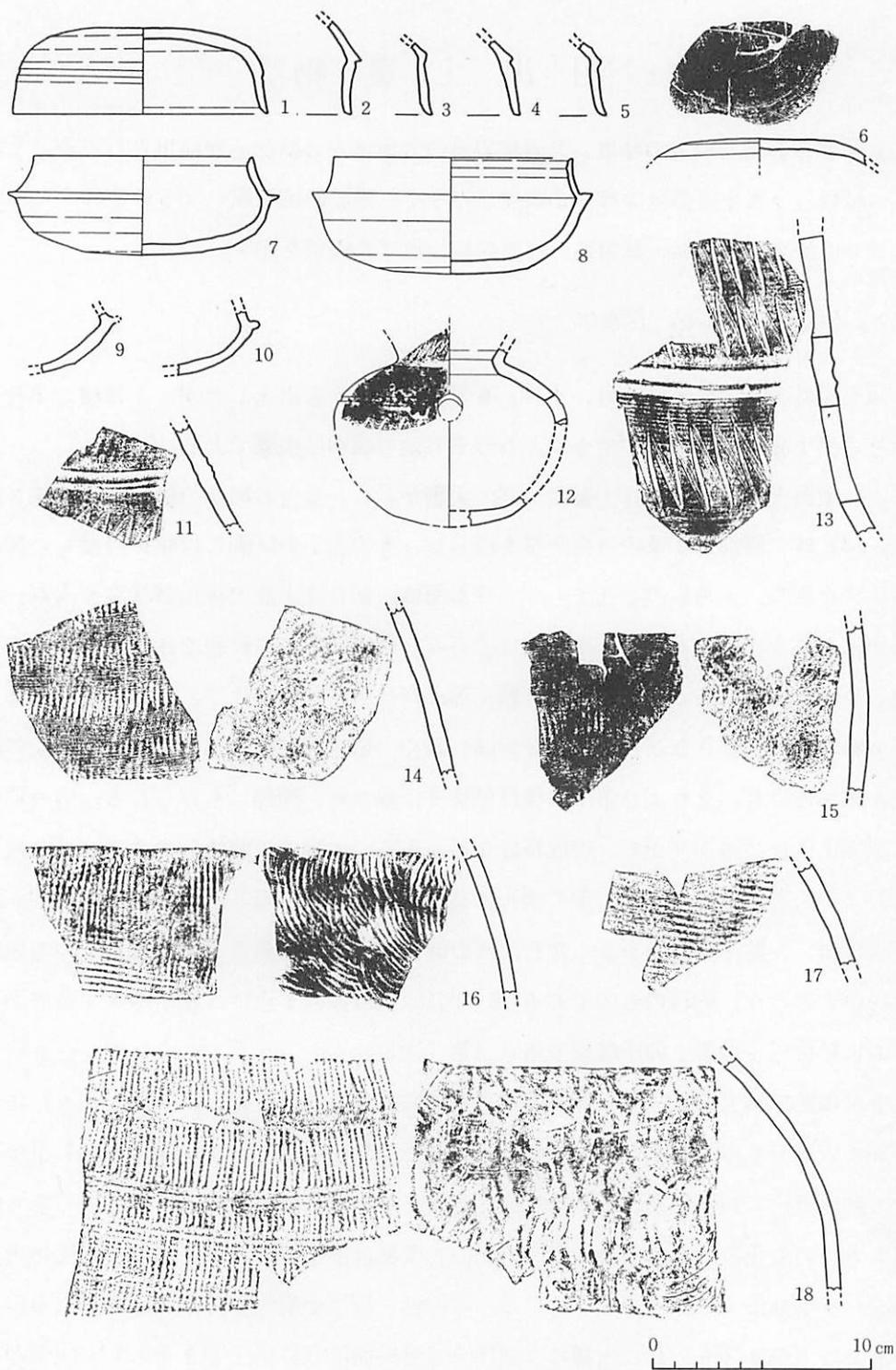
2年度にわたる調査の結果、5号墳以外の各古墳から副葬品が検出されたが、それらの品目のうち土師器は少数で小破片しかなく、器形器種を窺いうるものはなかった。ここでは須恵器・埴輪・鉄製品・装飾品についての概要を記す。

1. 須恵器 (第3図; 図版20上)

須恵器は1号、2号、3号、4号、6号の各古墳から出土したが、1号墳と3号墳以外の出土品は少数の細片であり、器形その他の識別は困難である。

1号墳出土の須恵器には、器台・甗・大甕がある。器台の脚部の破片2点(第3図11、13)は、腹部に2条の三角凸帯を巡らし、その上下の区画には屈折の激しい櫛描波状文を施し、三角形の透孔をもつ。外器面は回転ヨコナデの後に波状文を入れ、内器面はおさえののち、ヨコナデ仕上げである。胎土に多少の砂粒を含むものの、青灰色の良好な焼成である。甗は頸部と胴上部それに胴下部の破片で、肩のはる胴上部から明瞭な線できびれながら外反する頸部へ続く(第3図12)。円孔の上位から一条の凹線が胴をめぐり、それより下位に櫛描波状文が施され、頸部にもみられる。内外器面に漆黒色の自然釉がかかる、焼成良好な器である。大甕は3個体分である。外面縦方向のタタキを部分的にヨコナデで消して文様化したもの(第3図14)は内面の同心円叩きは弱く、胎土に砂粒を多く含む焼成の弱い明灰色の色調をなす。他の1つも色調は灰色と異なるが、同種のものである(第3図15)。最後の1点は、格子叩きを器表面にもつ口縁部近くの胴上部小破片である(第3図17)。

3号墳出土須恵器には坏・坏蓋及び大甕の破片がある。坏蓋(第3図1~5)は天井部の大部分をヘラ削りし、天井部と口縁部の境界は突出して鋭い稜線をなし、そこから開きぎみに口縁に及ぶ。胎土焼成とも良好で、青灰色の色調をなす。坏(第3図7、8)の立上りは2cm前後でやや内傾し、受部は水平にのびる。体及び底部の大部分をヘラ削りして、底は平に仕上げる。この他、坏が小形化し受部の退化したものもみられる(第3図9、10)。大甕は2個体分で外器面は浅い格子叩きをもち、内器面はほりの細かな青海波文を軽く部分的にヨコナデして消したもの(第3図16)と縦方向



第 3 图 出土須恵器実測图

11~15, 17; 1号墳 1~10, 16, 18; 3号墳

の叩きを横位の凹線もしくはナデで消して文様帯をつくり、内器面にほりの粗い同心円文を部分的にヨコナデで消すもの（第3図18）である。前者は胎土は緻密で焼成も極めて良く、黒灰色を呈す。他方後者は胎土に多少の砂粒を含み、焼成が良好で、外器面は淡赤茶色の色調である。（松尾・渡辺）

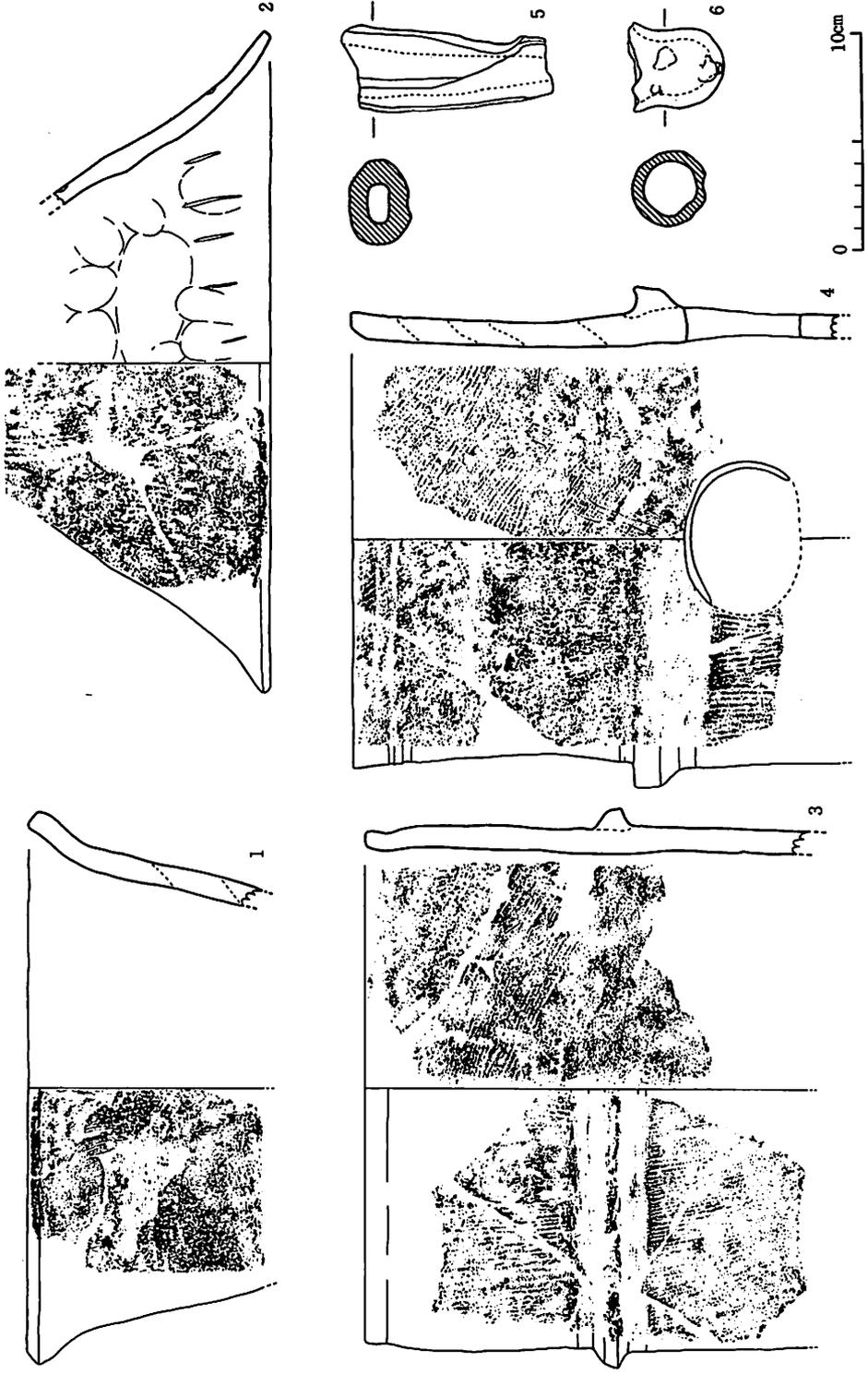
2. 埴輪（第4、5図；図版20・21）

埴輪片はすべて1号墳の石室内とA・B両トレンチ内から、原位置と遊離した位置で出土した。出土した埴輪は円筒埴輪と形象埴輪に大別できるが、その多くは円筒埴輪である。なお円筒埴輪には朝顔形を呈すものが2片ある。

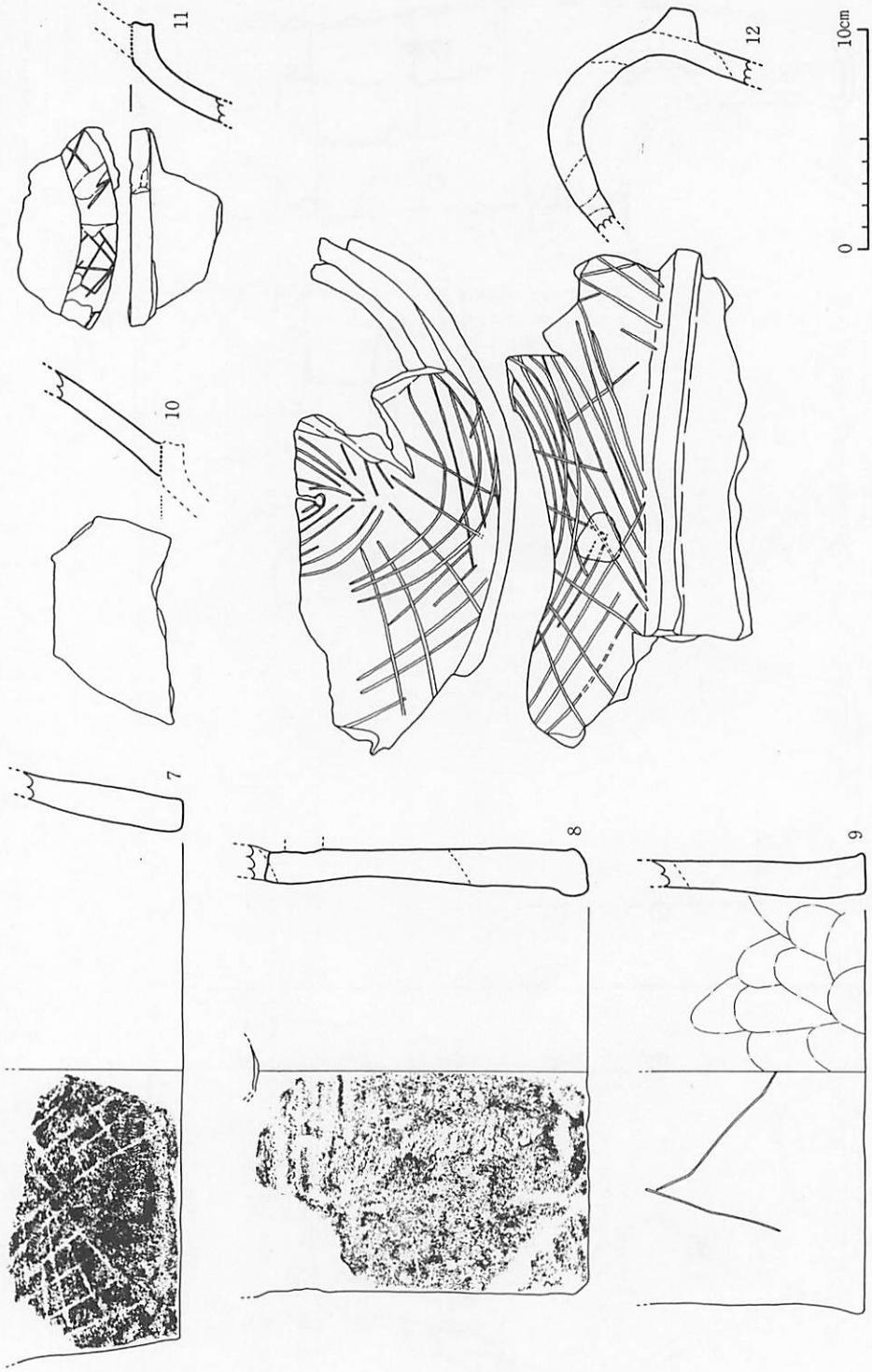
円筒埴輪は口縁部が外反するもの（第4図1）と直立するもの（第4図3・4）に大別できる。前者は焼成が良好で、外器面には縦方向の目の細かいハケ調整が、内器面には横方向のナデ調整が施されている。後者は外器面に縦方向の粗いハケ調整を施し、内器面には指で押さえた後、斜方向のハケ調整を施し、突帯を貼り付けた部分のみナデ調整を加えている。4の口縁下には接合部の強化のため、ヘラ状の道具でナデしており、その結果として、2本の浅い凹線が確認できる。底部では内器面に指頭状圧痕が顕著に見られるもの（第5図9）もある。外器面には細かいハケ目を縦方向に施し、2本の沈線が認められる。また格子状に沈線を施しているものもある（第5図7）。これらの円筒埴輪は胎土中に長石や雲母粒を多量に含んでおり、やや粗い。

第5図10・11は朝顔形円筒埴輪の接合資料である。接合面はともに横ナデが施され、11にはその上に沈線を不規則に数本施している。焼成はあまり良くない。

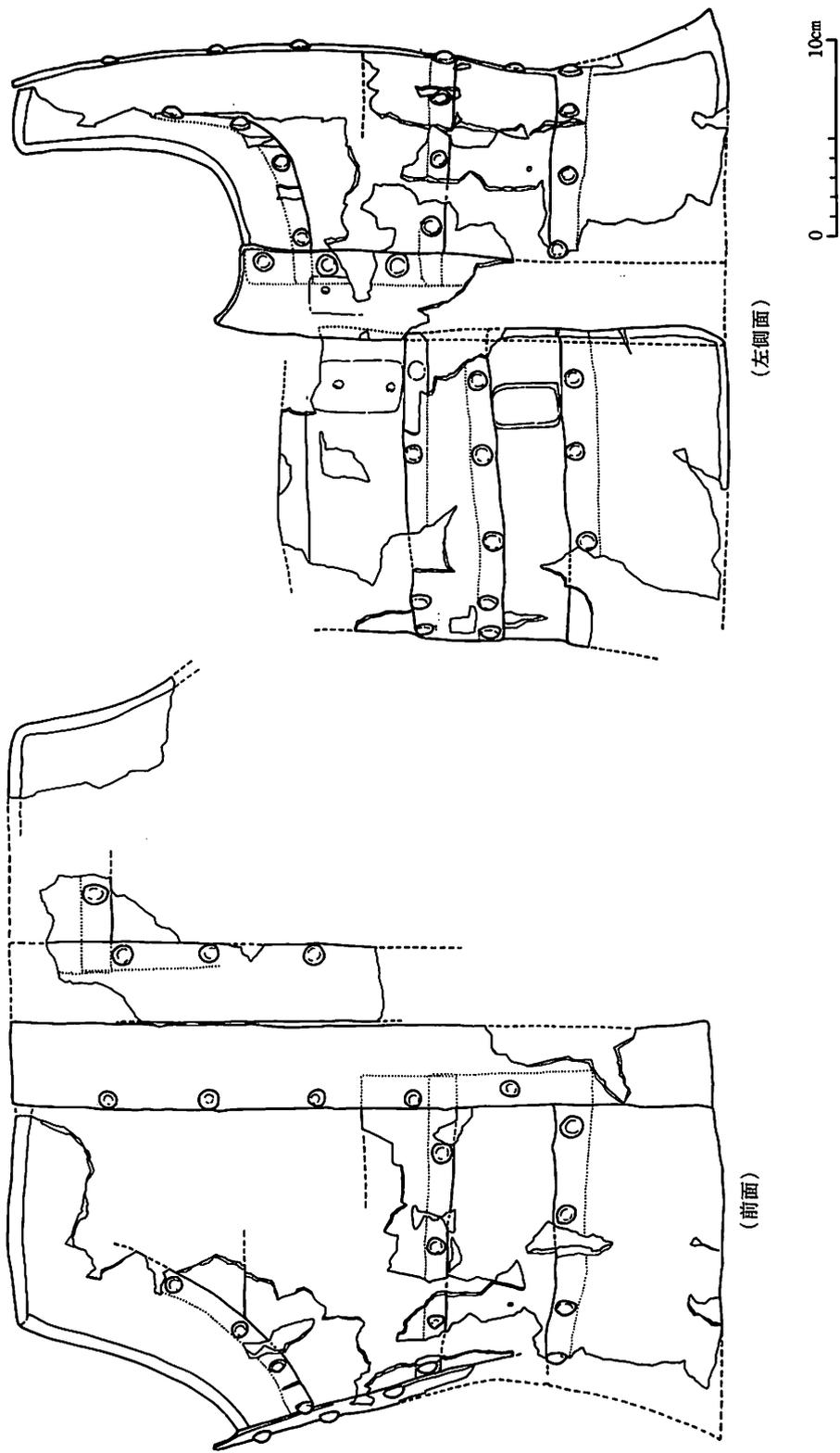
形象埴輪と思われる破片は14片出土しているが、全体の器形がわかるものはない。第4図2は、裾が大きく広がる底部片である。外器面に縦方向のハケ目を施した後、2列の連点文を施している。内器面は指頭で押圧しており、部分的にヘラ状の用具で削った跡が認められる。同様の破片がもう一片あるが、裾部があまり開かず、別個体であろうか。第4図5は筒状を呈したもので、人物埴輪の腕であろうか。6は手捏ね土器状のもので、底部には焼成後に穿孔を加えている。第5図12は、断面形が大きく「U」字形に内湾しているもので、上から見るとゆるやかに湾曲している。また正面より見ると頂部は中央が凹み、左右の端が上がっており、特に右端はかなり強く上が



第4图 1号出土植輪突測図(1)

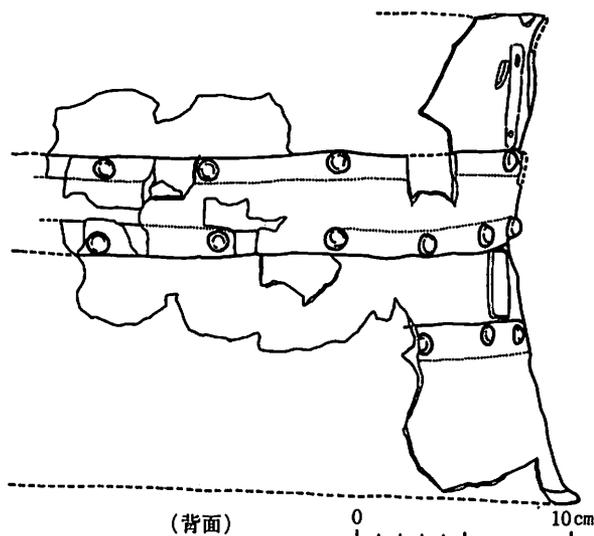


第5图 1号墳出土埴輪実測図(2)



第6图 3号坑出土短甲实测图(1)

っている。文様は凸帯より上に限られ、直線・曲線を網の目の様に描いているが、頂部に曲線が多い。また破片の先端部に焼成後穿孔を加えている。全体の様相は鞆に一番良く似ているが、細部の形などが若干異なっている。
(渡辺)



第7図 3号墳出土土短甲実測図(2)

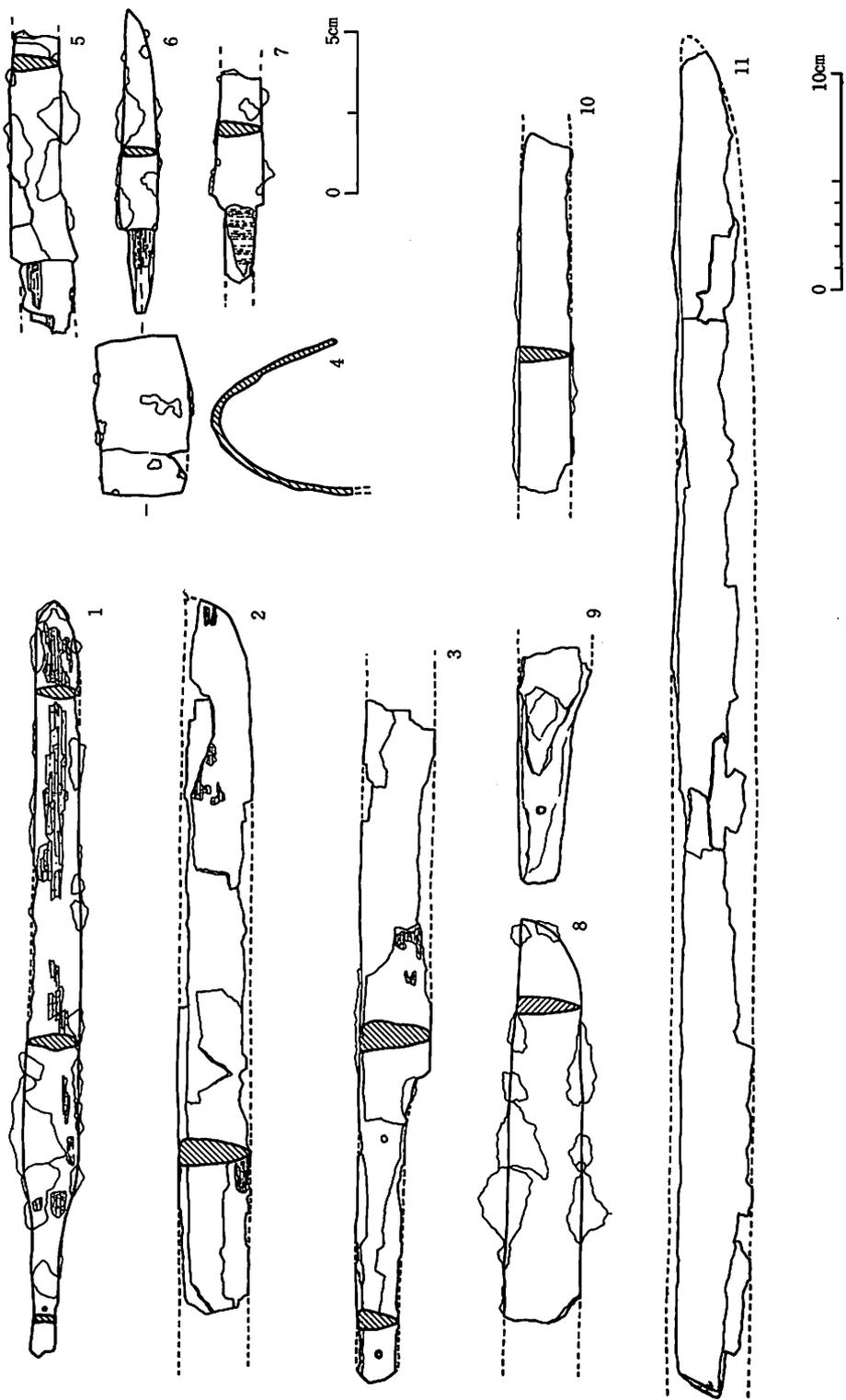
3. 鉄製品

短甲 (第6・7図; 図版22)

3号墳の石室右袖石寄りの部分でまとまって出土した。豎上3段、長側4段からなる横矧板鋌留短甲である。右脇両側に蝶番板を2ヶ所とりつけて開閉装置をつけた右脇開閉の2枚胴である。左前胴の大半と後胴の大部分はない。押付板は $\frac{1}{4}$ 程度残すのみである。復元すると前胴の高さ約35cm、幅約40cmを測る。右前胴は裾板1、豎上第1段1、帯金2、地板3、引合板1、蝶番板1の計9枚の鉄板よりなる。欠損部が多いため長さは不明であるが、地板の幅7~8cm、帯金の幅5cmほどで、地板と帯金の重なる部分は1.5cm程度である。引合板と蝶番板の幅約4cm、後胴の長側1段と3段、それに右前胴の長側1段の蝶番板上には長方形の蝶番金具があり、2ヶ所鋌留の剝落した跡がみられる。裾の覆輪には鉄包覆輪を被せる。右前胴長側3段には腰緒孔が1ヶ所みられる。ワタガミ緒孔と思われる孔を2ヶ所もつ板金も破片中にみられたが、正確な部位は不明である。
(西谷)

刀子 (第8図5~7)

2号墳より2点、6号墳より1点出土した。5は2号墳玄室床面上で鉄剣の上のった状態で出土し、残存長9.2cm、切先を欠き茎も完存しない。身幅1.6cm、棟幅0.4cm、茎長2.2cm、茎幅1.6cmである。6は2号墳玄室内の北側壁腰石上面の積み石



第8图 出土铁器实测图

1·5·6；2号墳 2·3·10；3号墳 8；4号墳 4·7·9·11；6号墳

の間から出土したもので、全長9.5 cm、ほぼ完形である。身長6.9 cm、身幅1 cm、棟幅0.2 cmで、茎長2.6 cm、片関である。7は6号墳玄室内の床面より出土し、両端を欠き、残存長6.4 cm。身幅1.5 cm、棟幅0.5 cm、茎長2.5 cm、茎幅0.9 cm、厚0.3 cm、両関である。3点とも茎に木質の遺存が認められる。

鉄剣（第8図1）

2号墳の玄室内より出土した。現存長32.8 cm、刃部幅2.3 cm。茎部分は先端を欠いており、長さ8.2 cm、幅1.3 cm、厚さ0.3 cmで、1個の目釘孔がかすかに認められる。両削関で、茎部・刃部ともに木質が遺存している。

鉄刀（第8図2、3、8、10、11）

3号・4号・6号で出土した。2は3号墳より出土したもので、残存長32.8 cm、身幅3.2 cm、棟幅1.6 cmである。同じく3も3号墳玄室内床面で出土し、残存長31.5 cmで切先を欠き、身幅3.5 cm、棟幅は錆膨れのため不明確である。茎は長さ14.2 cm、幅1.6~1.8 cm、2個の目釘孔を有す。2は切先部分に、3は刃部に木質が遺存する。8は4号墳玄室内の床面より出土。刃部のみで長さ18.5 cm、身幅3~3.5 cm、棟幅0.8 cmで全体的に錆が付着し、かなり腐蝕している。11は6号墳玄室内より出土し、切先をわずかに欠くが、残存長61.5 cmを測る最長のものである。身幅、棟幅は不明確である。茎部分で鉄片2片が出土し、目釘孔が認められるが、おそらくこれの茎部分と思われる、この茎部分を加えると72.4 cm以上であったことになる。

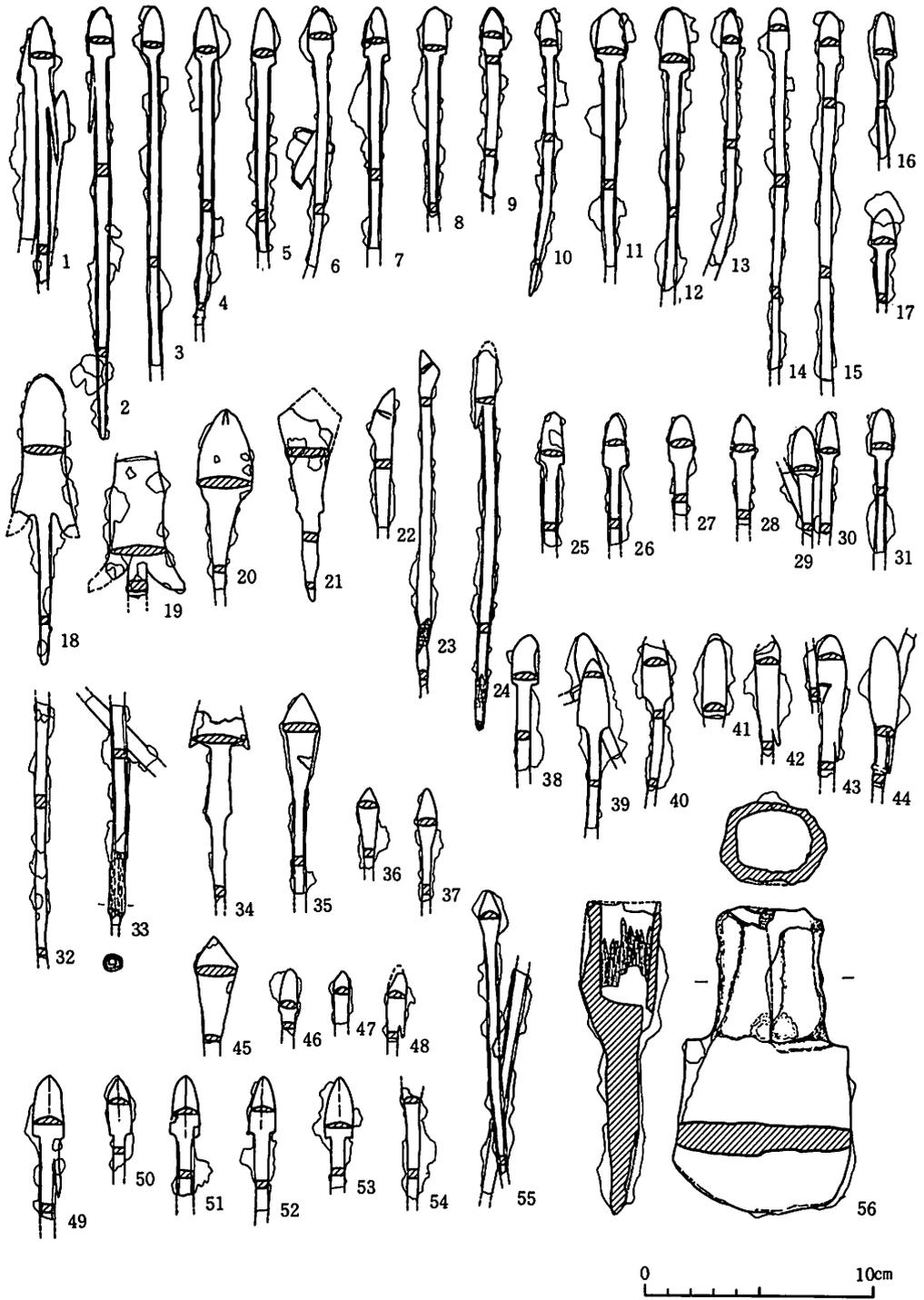
責金具（第8図4）

6号墳より出土した。幅4.5 cm、厚さ2 mmの薄い鉄板を折り曲げたもので、責金具の一部であろう。 (古荘・平井)

鉄鏃（第9図1~55；図版23下）

1号墳より約50本、3号墳・6号墳より各々4本が、全て玄室床面上で出土した。

1号墳より出土したもの（1~17、22、24~31、35~44、46~55）は全て細根式鏃である。そのうち型式を確認できるものは、両丸造篋被柳葉式鏃19本、片丸造篋被柳葉式鏃10本、片刃箭式鏃2本、両丸造篋被鏃箭式鏃3本、片丸造篋被鏃箭式鏃3本、鑄造篋被柳葉式鏃5本の計42本である。1~8、25~28、30、38は両丸造篋被柳葉式であり、1・2は片側に細く鋭い逆刺をもつ小爪付鏃である。2は全長18.7 cm、鏃身



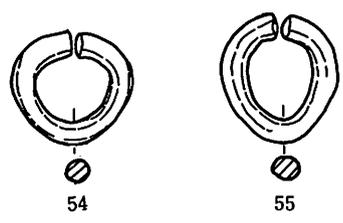
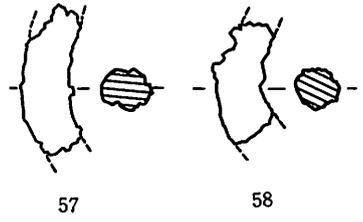
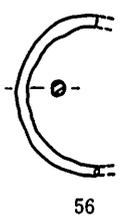
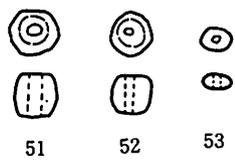
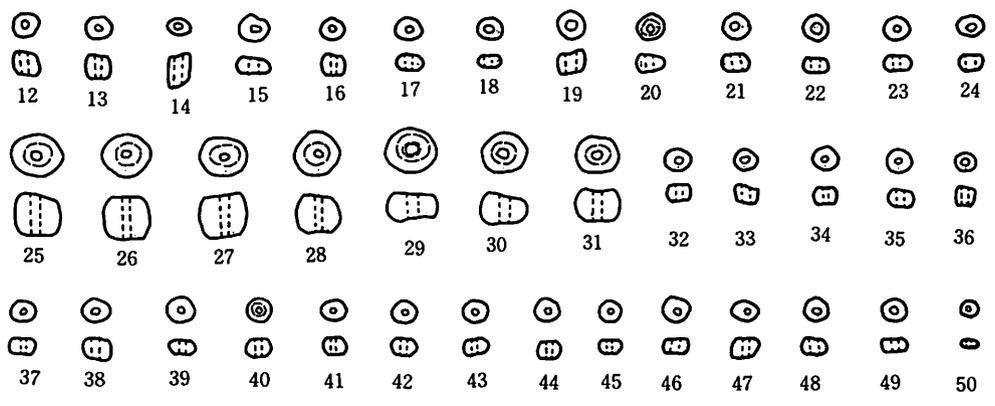
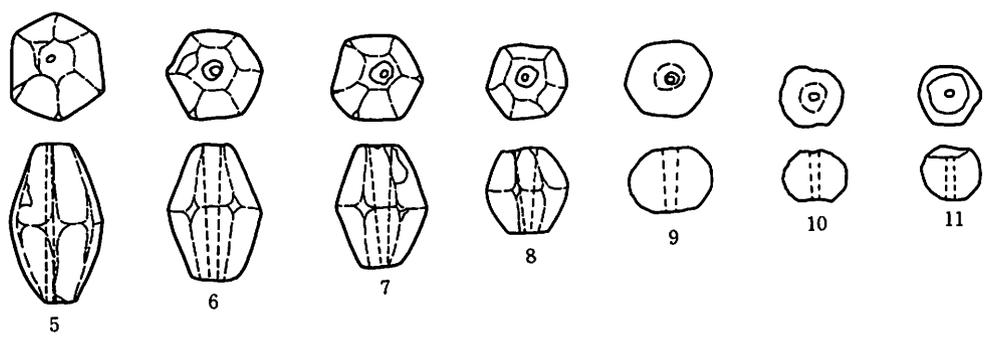
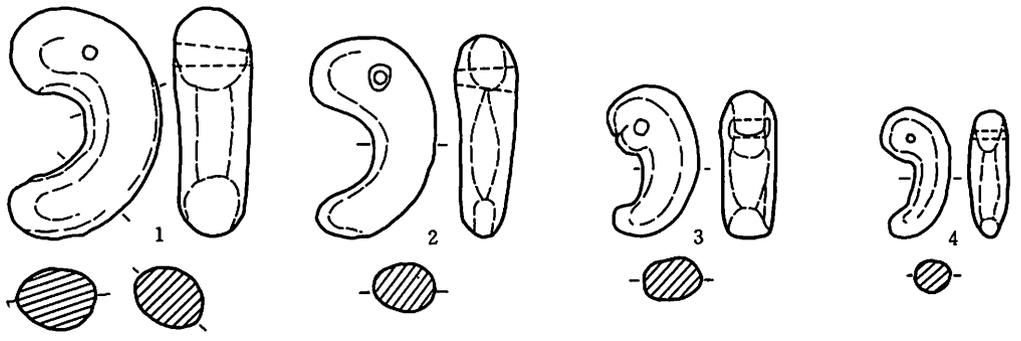
第9图 出土鉄鏃・鉄斧夷測図

1~17, 22, 24~31, 35~44, 46~55, 56; 1号墳 20, 23, 33, 45; 3号墳 18, 20, 21, 34; 6号墳

長 2.1 cm、身幅 1.1 cm、厚さ 0.3 cmを測る。9～17、29、31は片丸造篋被柳葉式で全長を計り得るものではなく、15が最大長15.9cmを計る。39～44も篋被柳葉式であるが前述の柳葉式に比べて鍔身が長く、44は4.5cmを計る。39、40は鍔身の関部が明確である。42、43、44は片側に鋭い逆刺をもつ小爪付鍔で、44は基部と篋被の境に段を有す。これらは鍔身長 4 cm、身幅 1.5 cm、厚さ 0.3 cm前後だが、全長を計り得るものはない。22、24は片刃箭式で、22は残存長 6 cm、鍔身長 2.0 cm、身幅 1 cm、厚さ 0.3 を計り鍔身の断面は三角形を呈す。24は片側に細く鋭い逆刺をもち、残存長16.4cm、厚さ 0.3 cm。基部に矢柄の痕跡が認められる。36、37、46は両丸造篋被鑿箭式、47、48、55は片丸造篋被鑿式である。48は片側に細く鋭い逆刺をもつ。37、55以外は鍔身のみで、鍔身長 2 cm、身幅 0.8 cm、厚さ 0.3 cmを前後する長さである。49～53は鑄造篋被柳葉式で、49は片側に鋭い逆刺をもつ。全長を計り得るものはないが、鍔身長 2.5 cm、身幅 1.2 cm、厚さ 0.3 cmとほぼ同じ大きさである。35は鍔身の中程で切先が内側に僅かに入り込み、他の柳葉式に比べると異形である。残存長 8.7 cm、鍔身長 3.2 cm、身幅 1.7 cm、厚さ 0.3 cmを計る。

3号墳から出土したものは、19、23、33、45の4本である。19は篋被広根柳葉腸袂式で、片側の逆刺と鍔身先端を欠失する。鍔身復元長 5.3 cm、身幅 2.5 cm、厚さ 0.4 cm、篋被は断面が長方形で太い。45は圭頭広根斧箭式、残存長 4.7 cm、鍔身長 4.1 cm、身幅 1.9 cm、厚さ 0.5 cmで、基部を欠く。23は篋被先刃箭式で、残存長14.6cm、鍔身長 2 cm、身幅 1.7 cm、基部に矢柄の痕跡が認められる。33は残存長11cmを計り、基部には矢柄が残存しその先端には木皮（桜）を巻いた痕跡が認められる。

6号墳からは18、20、21、34の4本が出土し、全て広根式鍔である。18は両丸造篋被広根柳葉式で逆刺の両先端を欠失する。鍔長12.5cm、鍔身長 5 cm、身幅 2 cm、厚さ 0.4 cmを計る。20は変形広根定角式鍔で、残存長 7.7 cm、鍔身長 5.5 cm、身幅 2.3 cm、厚さ 0.4 cm。21は有段篋被圭頭広根斧箭式鍔。鍔身の先端を欠き、復元長 9.3 cm、鍔身長 5.5 cm、身幅 2.3 cm、厚さ 0.4 cmを計る。34は短い逆刺をもつ有段篋被腸袂三角形式である。鍔身の3分の2程欠失し、残存長 7.8 cm、篋被の長さ 3.2 cm、断面は長方形で太く、基部境に段を有す。



第10图 出土装饰品实测图

鉄斧（第9図56）

1号墳の玄室床面右側壁付近から1点出土した。大形の鉄斧で刃部先端はゆるやかな弧状をなしており、長さ7.3cm、幅7.5cm、断面は厚さ1.4cmの長楕円形を呈している。袋部は、厚さ0.4cmの鉄板を両側端部を折り曲げた合せ目のあるもので、長さ5.4cm、幅4.5cmで内径3.3×2cmの長楕円形を呈し、深さ4.5cmである。袋部には木質が残っており木柄の装填が施されていたと思われる。（茂山）

4. 装飾品（第10図；図版24上）

装飾品は勾玉4点、切子玉4点、丸玉3点、小玉330点、金環2点とその他の耳環の残欠が6点出土している。これらは1号墳・3号墳・6号墳より出土したものである。

勾玉（1～4）

3号墳より2～4の3点、6号墳より1の1点が出土した。1、2は碧玉製で、4はガラス製である。1は淡緑灰色を呈しにぶい光沢を帯びる。長さ3.84cm、厚さ1.2cmを測る。2は青緑灰色を呈し、1に比べて薄手である。長さ2.67cm、厚さ0.72cmを測る。1・2の貫孔はともに片側から穿たれている。3は青緑色を呈し頭部前面に一条の刻線が横に走っている。長さ1.93cm、厚さ0.71cmを測る。4は紫紺色を呈し、4点中最も小さい長さ1.84cm、厚さ0.46cmを測る。3・4は気泡がみられる上に表面がやや風化し、やや見劣りする。

切子玉（5～8）

水晶製のもの4点が全て6号墳から出土した。側面は均整よく六角形を形づくっているが、稜は磨滅し表面も傷がかなりはいっている。全て片側から穿孔されている。5～7はほぼ大きさが均しく、8はやや小ぶりである。最大長2.63cm、最小長1.37cmである。

丸玉（9～11）

全て6号墳より出土し、9、10は橙色を呈し、11はやや赤味を帯びた橙色を呈し、軟玉製である。表面は11が入念に磨かれてあるほかは雑に仕上げられ、凹凸がかなり残っている。長さ0.74～1.03cm、外径0.96～1.27cmを測る。いずれも片側から穿孔さ

れている。

小玉 (12～53)

1号墳より151個、3号墳より156個、6号墳より3個出土した。すべてガラス製である。25～31、51、52のやや大ぶりのものとその他の小ぶりのもの到大別できる。大ぶりのものは紫紺色、青緑色、淡青色などの色を呈している。大ぶりのものは外径が6.65～8.90mmであり、小ぶりのものは外径2.00～5.05mmである。

耳環 (54～58)

54、55は金環で、6号墳出土のものである。表面には錆がういておらず金本来の色を保っている。径3mmの金属心に金メッキを施したものと思われる。56も6号墳出土である。径1mmほどの針金状のもので、耳環の1部と思われる。57、58も6号墳出土である。本来同一体であったと思われるが、表面に錆がうき凹凸があり本来の大きさは不明瞭である。これらも耳環の一部と思われる。 (坂田・武内)

五 ま と め

1981年、82年と2次にわたるカミノハナ古墳群調査で得られた知見を、ここでまとめておきたい。

カミノハナ古墳群は、天草諸島の一角、永浦島の東端近くの尾根上にあつて、8基の横穴式石室よりなる古墳群である。すでに述べたように、天草諸島に分布する古墳(群)は、瀬戸を見おろす丘陵上か、それに続く岬の突端上にあつて、対島や長崎県沿岸部にみられる古墳の立地と頗る類似する。古墳の占地するこれら島々は、いずれも海岸線は入り組んで急激な落差をもって海に没するため、平野は極めて少く、耕地に供しうる土地も乏しい。カミノハナ古墳群の場合でも、古墳群西側の谷が海に接するあたり、わずかな低平地がみられ、付近の海岸から弥生土器や土師器、須恵器片が採集されることから、居住地をこのあたりに想定しえても、耕地とするには狭隘すぎる。天平16年5月16日の地震により、かなりの可耕地が水面下に没したと考える限り、農耕生産を基盤とする内陸部の古墳のあり方とは、著しい対照をなすといえよう。

8基のうち調査した6基の古墳の石室はいずれも共通したいくつかの特色をもつ。すなわち矩形に近い玄室のプラン、形式的な玄門・羨道をもつこと、玄室の奥壁及び

両側壁の下半に巨石を配し、奥壁両隅は巨石上部より抹角状に石を積みあげ、左右壁は塊石を持ち送り状に平積みしていること、何ら排水施設をもたぬこと、羨道は玄門に向って下降することなどである。これらの形状は、乙益重隆氏のいわれる「半地下式肥後型」^{註1}に近い。この点につきもう少し掘り下げてみると、3号墳で墳丘に入れた2本のトレンチの所見では、地山整形した後にわずかに掘り下げて玄室のプランをつくり、左右奥壁に巨石を配してその背後に20～30cmばかり粘土を積みあげて巨石を安定させ、その巨石背後の粘土上部から壁体を持ち送り状に構築するものである。従って巨石は腰石の機能をはたしていない。4号墳では一部巨石上に、平積みした壁体のすわる状況がみられるが、これは4号墳の場合、巨石の背が他のものより著しく高いためであり、「石障状」を呈するものが本来的なものと考えられる。

羨道部は特異な構造をする。羨道の床面には特別な処置はされず、玄門に向って下降し、玄門の内側に配された闕石の上端に接し、段をもって玄室床面に達する。羨道の両側には石室控え積みの石がそのまま側壁となるものと、側壁の前に1枚の板石をたてかけるものがあるが、いずれも塊石と粘土で羨道を埋め、その上部には控え積みに続く板石を載せ、また玄門上部には、墳丘を構成する控え積みの石でおおっている。閉塞は1～2枚の板石でもって玄門でなされるが、3号墳でみられるように、玄門と側壁の間に墳丘に埋めこまれた塊石状の石が延びだして、閉塞石と接するものがある。すなわち墳丘の一部を破壊しなければ、通路として役立たぬものである。これらの羨道のありさまは、高さが低いこと、狭いことと併せ、本来的な羨道の役割ははたしていないことを示している。これと呼応するように、石室背後の控え積みは、極めて短く、小型竪穴式石室のそれと似る。以上のような構造上の特質はあまり例を見ないものであり、^{註2}強いて云えば石障系古墳の構造と類似するものである。こうした点から、カミノハナ古墳群の石室構造は、横穴式の構造であっても付加的に羨道・玄門を設けた竪穴式石室の伝統を強く受け継ぐものといえよう。

カミノハナ古墳群の構築年代を示すものに須恵器がある。1号墳出土の大甕・甕・器台、3号墳出土の坏・坏蓋・大甕をとりあげてみよう。1号墳で検出された大甕片は、外面に浅い格子叩きを施し、内面は同心円叩きを密に施したのち、部分的にスリ消し調整を行っている。また細かな縦方向の平行叩きののち、外面を刷毛でナデる手

法をみせるものは、内面の同心円叩きを施したのち、半スリ消し調整を行っている。このような手法の須恵器は第1型式に多くみられる。また器台脚部の千鳥足状に配置された三角形の透孔の上下にみられる凸線は大きく、明瞭な凹凸をみせている。甕は体部最大径がその上方3分の1近くにある扁平気味の球体であり、山鹿市付城横穴出土品に^{註3}近い。これらの須恵器は第1型式の中でも新式に属するものである。他方3号墳出土の坏蓋は、天井部が低く稜は鋭く突出し、この稜の近くまで粗いヘラ削りがみられ、また坏身の立上りは高くやや内傾し、上外方にのびる受部をもっている。大甕は細い緻密な平行叩きを回転によるナデで部分的に消し、内面の同心円叩きを半スリ消しの調整を施したものである。これらの調整がなされる須恵器は、その器の形態とあわせ、須恵器第1型式でも新式のものであり、第1号墳出土のものと同様、5世紀の第4四半世紀にその年代を置くことができよう。3号墳では器形が小さくまた浅い坏も出土しており、須恵器の第3型式の段階で追葬が行われたことを知る事ができる。

3号墳で出土した横矧板鋌留短甲と類似したものは、九州に限っても20遺跡以上の古墳から出土^{註5}している。この種の短甲を伴出する古墳の内部主体は、長持形石棺・竪穴系横口式石室・横穴式石室・横穴、地下式横穴と様々であるが、いずれも5世紀中葉から末葉にかけての時期に比定される年代のものである。熊本県に於ては玉名市伝佐山古墳、菊水町江田船山古墳、城南町將軍塚古墳、植木町マロ塚の各古墳から出土している。このうちマロ塚については委細は分らず、將軍塚のものは破片であるので除くと、船山古墳出土の短甲は竪上3段長側3段で構成されるもので、カミノハナ3号墳のそれとは異なる。伝佐山のものは竪上3段長側4段であって、形態的にも近いが、開閉する所に異りがある。竪上3段長側4段の7段構成で、右脇開閉の横矧板鋌留短甲は、福岡県小田茶臼塚古塚^{註6}、真浄寺2号墳^{註7}、大分県扇森山横穴^{註8}、宮崎県上江小木原地下式横穴^{註9}など九州地域に広範に分布し、高霊地山洞にも類例があるが、これらとは右前胴の後胴よりの部分すなわち裾部近くと、後胴の右前胴よりにつけられた開閉装置に若干の差異が認められる。すなわち本墳出土のものは2.5×3.5cmと2.5×5cmの方形蝶番金具がとりつけられ、2ヶの鋌留でとめられているのである。多くの横矧板鋌留短甲では、楕円形に3ヶの鋌留もしくは方形4ヶの鋌留で蝶番金具を固定する

のがみられる。こうした細部の所作のちがいはあっても、この種の短甲は5世紀後半に使われたものとしてよいであろう。

これら以外の遺物で年代を決める材料として埴輪があるが、小破片が多くまた量も少ないために、十分な検討はできないが、調整方法その他からして5世紀代のものとみて大過なからう。

以上により、カミノハナ古墳群は5世紀末葉から6世紀後半にかけて形成された古墳群であることが知れよう。

カミノハナ古墳群は、1号墳を頂点として南にのびる尾根上に4基、3号墳から西に分れる尾根に3基、4号墳の西に1基の計8基で構成されている。こうした分布状況からは、まず1号墳系列の高い尾根のグループが築造され、3号墳や4号墳の西側にある古墳が遅れてつくられたと想定できるであろう。このことはまた、副葬品と石室のプランからも指摘できる。1号墳から4号墳にかけての石室は正方形に近く、5・6号墳は長方形を呈する。今石室の長さとの幅の比を数値で示すと、1号墳1.2、2号墳1.4、3号墳1.26、4号墳1.37、5号墳1.56、6号墳1.6となり、カミノハナ古墳群では正方形に近い石室のプランから長方形プランへと、石室の形態が変化してゆくことが窺える。1号墳と3号墳からは、ともに須恵器第1型式のものが出土しており、それだけでは先後関係はつかめないが、立地条件、石室のプラン及び埴輪を持つ点から、3号墳より少し遡る時期のものともみなすことができるとすると、カミノハナ古墳群は1号墳→3号墳→4号墳→2号墳→5号墳→6号墳という順序が考えられる。但し、1号墳と3号墳では石室の構造が大変似ており、また副葬品からはさほど明瞭な時期差が認めがたいこと、2号墳と4号墳の石室プランが類似することなどを考慮し、立地条件をも加味すると、1号墳と3号墳、4号墳と2号墳というようなまとまりにくくなりうる可能性もないわけではない。このように、カミノハナ古墳群が一系列下に形成されたものか、あるいは二系列併存下に営まれたものかについては、当時の首長権のありかた、社会構造の問題まで含めて、天草地方の古墳の歴史的 성격にかかれるものであり、今後さらに資料の増加をまって検討を行ってゆきたい。

天草を含む熊本県中部地域に於ける横穴式石室墓の初期の例として、宇土市城2号墳と城南町將軍塚古墳をあげることができる。前者は竪穴系横口式石室、後者は石障

系石室と構造は全く異なるが、いずれも5世紀中葉ごろに構築されたことが想定されている。カミノハナ1号墳はこれらにやや遅れて築造されたのであり、構造面からすると石障系古墳と共通点を多くもつことはいうまでもない。すなわち石障系古墳でも古い段階のものは正方形に近い平面プランをもち、石障の上端から上は四隅の稜線を消すように持ち送りして、ドーム状の天井を構成する。カミノハナ1号墳では石室上部が破壊されて天井構造は不明であるが、石室の四隅を抹角状に石を配することから、ドーム状の天井構造を想定しうる。さらに石室の長幅比が石障系古墳でも古い段階の小坂大塚の場合1.14であって、カミノハナ1号墳と近い。カミノハナ古墳群に共通する構造である壁体を構成する石材が、石室下部に配された巨石の上端にかからない、いわば「石障」状の構成をとることも共通点としてあげられる。また玄門内側に設けられた比較的高い閻石は石障の前障と相通じるところがある。石障系古墳はその後、アーチ・ドーム構造となり、ついには石屋形をその内部にとり込むことで終えん^{註10}を迎え、一方、カミノハナ古墳群では石室を長方形プランへと変化させてゆくが、1号墳と古式の石障系古墳にみられる構造上の類似は、竪穴系横口式石室とは異った他の共通したインパクトを受けて形成されたことを窺わせる。もっともこの点に関しては、他地域との比較検討を含めさらに追求しなければならぬ問題である。 (米倉)

註1 乙益重隆「石障系石室の成立」『国学院大学大学院紀要』11, 1980

註2 本渡市の新田古墳の構造と類似する。

註3 松本健郎・勢田広行「肥後の須恵器(-)」『九州考古学』56, 1982

註4 以上須恵器については、中村浩他『陶邑』Ⅲ, 1978 によるところが多い。

註5 この点については松本健郎氏の御教示にあづかることが多かった。

註6 柳田康雄他『小田茶臼塚』1979。

註7 九州歴史資料館収蔵目録1, 1982

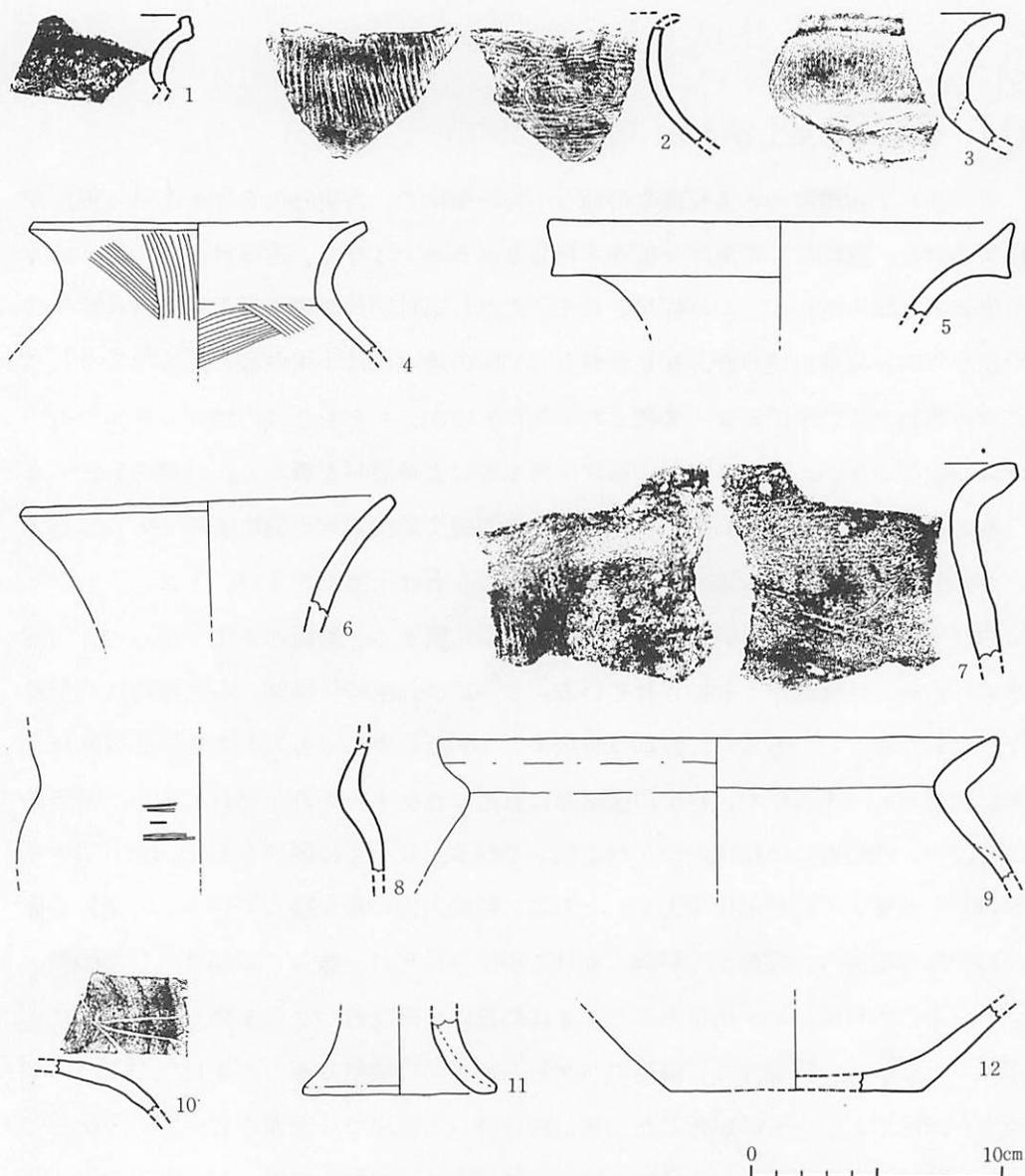
註8 真野和夫「竹田市扇森横穴出土遺物」『大分県地方史』84, 1979

註9 宮崎総合博物館『日向の古墳展』1979

註10 河野法子「石障系古墳の一考察」『肥後考古』2, 1982

付1 永浦島採集土器（第11図；図版24下）

カミノハナ古墳群のある丘陵を南西へ下った海岸で、古墳時代を主とする土器片が採集された。遺物はこの海岸一帯から採集されるのではなく、古墳群直下の湾入部分（第14図×印の所）からのみ採集された。ただし第11図10の須恵器の一点だけはその地点から50 m程東の地点から採集された。×印の地点には小川が流れ込んでおり、これらの遺物がこの小川によって流されてきたものか、もともとこの地点にあったものかは明瞭ではない。採集された土器片は海水等による磨滅が著しく、時期のわからないものが多いが、時期のわかるものでは少数の縄文時代晩期土器片を除くと、ほとんどが弥生時代後期から古墳時代の土器片で、とりわけ土師器が多い。1は「く」字状に内弯する口縁部片で、いわゆる黒色磨研土器に属する。器面の風化が激しい。口縁部の外器面には沈線が2本施されている。2～12は弥生時代後期から古墳時代の土器片と思われるものであるが、詳細な時期までは判断しかねるものもある。2は外反する口縁部をもつ土器片で、特に口縁端部は急激に外反するものと思われる。外器面には縦位の、内器面には横位のハケ目を施している。3・4は頸部がやや「く」字ぎみに折れて外反する口縁部片である。ともに、頸部内面に稜を持っている。3は外器面が口縁部に縦位の、頸部から肩部にかけて横位のハケ目を施し、頸部はへらで強くナデている。内器面はナデ調整である。4は外器面に縦位のハケ目を施し、内器面はよくわからないが、頸部近くに横位のハケ目がかすかに観察できる。4に比べ3の方が胎土が緻密である。5は退化した二重口縁を持つ土器片で、全面をていねいにナデており、焼成も良好である。6はゆるやかに外反する口縁部片であるが、器面の保存状態が悪く、調整は不明。胎土は大粒の石英が入っており粗い。7は「く」字状に外反する甕形土器の口縁部片で、外器面には縦位の、内器面には横位のハケ目を施している。内器面の頸部より下では斜方向のケズリを施している。8の頸部片は他の土器片に比べ焼きが良い。外器面に横位のハケ目、内器面にはナデ調整を施している。小形の壺形土器であろうか。9の口縁部片は器表面の遺存度が極めて悪く、調整等一切不明である。頸部は「く」字状に折れ、口縁端部を細く尖らせている。胎土は砂粒を多く含んでおりやや粗いが、焼成は良好である。10はへら記号を有する須恵器の坏蓋片



第11図 永浦島採集土器実測図

であるが、これは前述のように他の土器片と採集地点が異っている。11・12は底部の破片である。11は甕形土器の脚台部、12は壺形土器の底部であろうか。11の破片は胎土が悪く、焼成もよくない。内器面が部分的に薄くはがれており、接合部の跡かと思われる。12は平底を呈する破片で、焼成は良好である。内器面に比べ外器面は凹凸が激しく、あるいはタタキ調整の跡かと思えるが、器面の遺存度が悪くはっきりしない。

(米倉)

付2 前島採集遺物

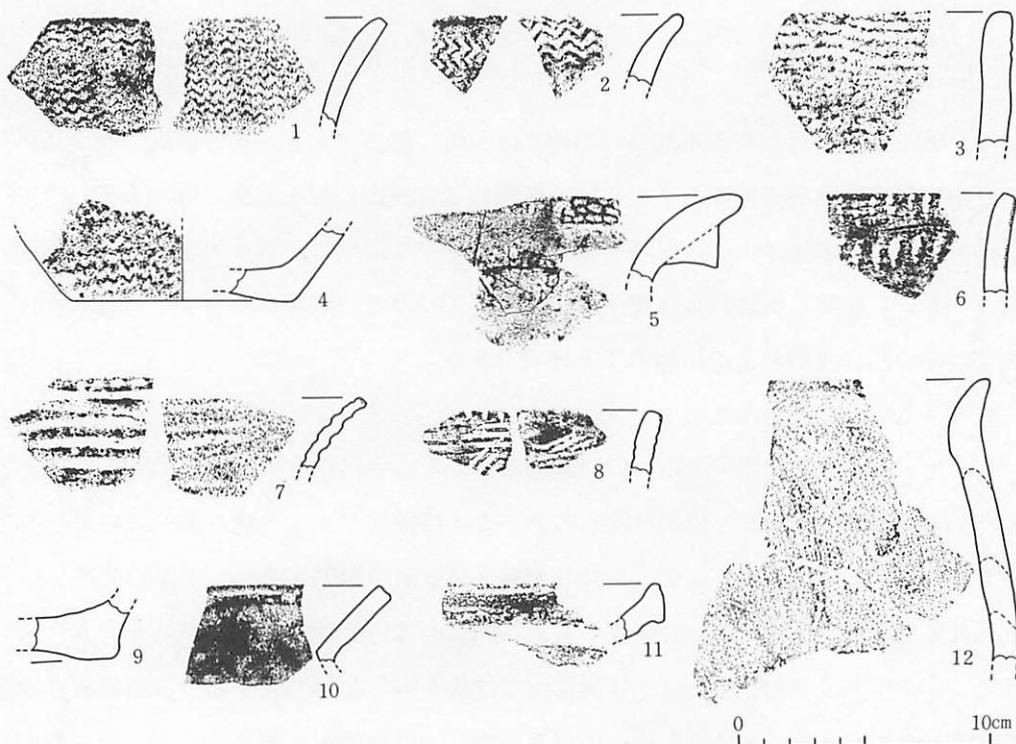
カミノハナ古墳群がある永浦島の南約2kmの所に前島がある。その前島にかかる天草五橋自動車道路第五橋のたもとには、昭和41年に調査された前島貝塚がある。^{註1}今回遺物を採集した場所は、この貝塚を南西に少し下りた海岸で、熊本大学臨海実験所の前方である。採集した遺物は永年海水に洗われていたため磨滅が著しく、一様に黒ずんでいる。特に土器の文様は極めて不鮮明である。

土器（第12図；図版25上）

1・2・4は山形押型文土器で、口縁部が外反し、平底を有するものである。3・5・6は円筒形を呈すると思われるもので、5は口縁部がラッパ状に開いている。文様は外器面のみで、3が条痕文（?）、5が施文具不明の押引文と極めて厚い凸帯、6が条痕文及び貝殻腹縁による押圧文である。内器面はいずれもナデているが、6は磨研状にていねいにナデている。7は両器面に沈線を施した曾畑式土器で、口唇部には刻み目を施している。8は両器面に条痕文を施し、口縁頂部に刻み目を施したものである。9は平底の底部片で、上げ底である。縄文時代後・晩期の可能性が強い。10～12は弥生土器で、すべて後期のものである。10は内器面にかすかにハケ状の調整が認められる。12は外器面にナナメのハケ調整を施している。 (米倉)

石器（第13図；図版25下）

採集された石器は打製石鏃1、磨製石斧2、石錘2、凹石1、礫器1、スクレイパー3ケである。1は砂質泥岩製の打製石鏃で、先端部は欠失している。凹基で左脚がやや長い。推定長2.5cm幅1.8cm。2は黒曜石の剝片で、右側縁に使用痕が見られるものである。断面は三角形で、左側面に自然面が残っている。3は凹石で玢岩製。横断面は隅丸の長方形を呈している。表裏にわずかな窪みが見られるが、磨滅が著しく使用痕ははっきりしない。4は玢岩製の石錘である。背面はなめらかに丸くふくらみ、腹面は平坦で凹凸が著しい。上下に紐かけの抉りを施すが、磨耗痕ははっきりしない。5は頁岩製の大型スクレイパーで、横断形は略三角形をなす。2次加工は全周に及ぶが、右側縁に特に集中している。6は泥岩製の礫器である。板状の原材を利用し、尖頭部と内弯する刃部を作り出している。打撃による階段状の剝離痕が尖頭部と刃部に

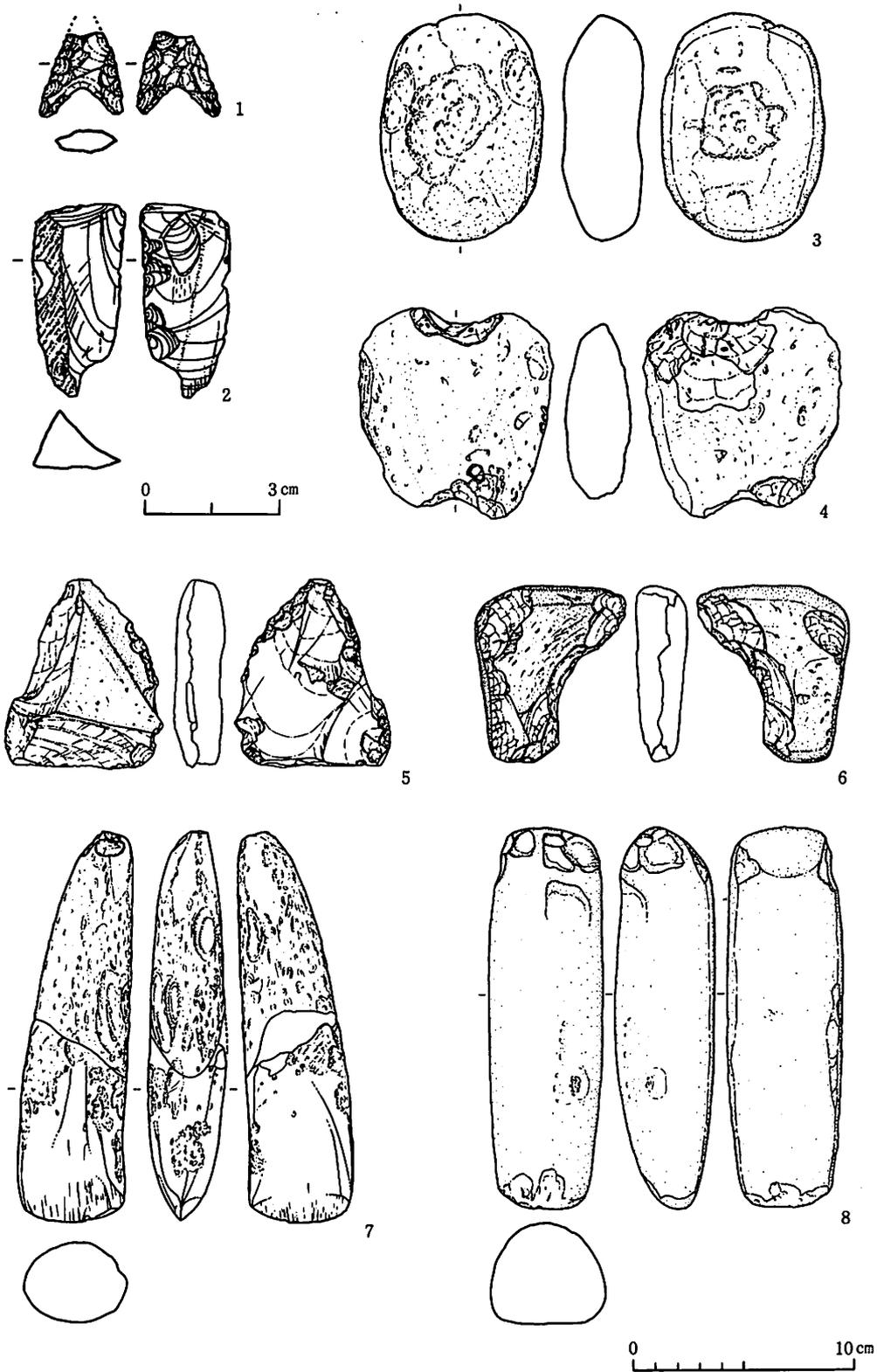


第12図 前島採集土器実測図

見られる。同様の石器は、九州では縄文時代前期以降海岸部の遺跡で多く見られ、貝類捕獲・調理の道具と考えられて^{註2}いる。7は乳棒状を呈する磨製石斧である。石材に泥岩を用いている。基部が片側へ著しく弯曲している。研磨は全体に及ぶが、特に刃部と基部の研磨が著しい。最大幅を刃部に有し、基部が縮まり、基端には打撃痕が残る。胴部には啄彫痕を留める。胴部2ヶ所に浅い抉りがみられるが、意識的なものであろうか。刃部は側面形で両凸刃をなし、使用痕は刃縁と約90度の方向に走る。胴部中ほどで2つに折れている。8も磨製石斧で砂岩製。正面形は長方形、横断面では蒲鉾形をなす。全体的によく研磨され、啄彫痕は見られない。基部形は縦断してみると腹面から斜め上にカットした様に尖る。基部背面では上方から2個所の抉りを入れ、そのすぐ下にも抉りを施す。刃部は側面形が片凸刃をなす。刃縁を下から見ると背面側へ弯曲している。円鑿形に近い片刃石斧である。使用痕ははっきりしない。(吉武)

註1 熊本県教育委員会「前島貝塚」『熊本県文化財調査報告』第九集 1968

註2 長崎県教育委員会『串島遺跡』1980



第13図 前島採集石器実測図